



小樽の繁栄「鯨」

鯨漁がいつ頃から始められていたか定かではないものの、江戸中期には既に行われていたとされる記録が残る。小樽では、明治20年代と大正期が鯨漁の最盛期であった。

鯨により作り出される風景は、明治から昭和初期の小樽を形成した主要な要素の一つである。それは、2月の終わり頃から鯨が産卵のために押し寄せて海が白く濁る「群来」だけではない。海岸に連なる番屋と漁夫によっても、それは形作られていた。

番屋とは、漁夫が寝泊まりする建物のことである。2月になると各地から漁夫が集まり、一つ屋根の下で大人数の生活が始まる。その語源は、江戸時代に運上屋から派遣された番人が、漁を行ったり漁民を監視していた小屋を「番家」と称していたことによる。明治20年代には北海道全体で9万人を超える漁夫が滞在し、小樽だけでも6千人がいた（明治21年）。親方家族の住居が一緒になることが多く、その場合は中央の土間で、漁夫と親方家族の場所が分けられている。建物としての番屋の魅力は、長くて太い木材による力強い空間が挙げられる。特に漁夫が寝泊まりをする「ネダイ」の中央から小屋組を見上げた時の迫力は、独特のものである。

建築学的には民家の一形態として、その特殊な共同生活に由来する平面構成にまず着目される。また、和風建築として捉えられる民家であるが、ここ北海道では小屋組や窓、装飾など洋風要素が積極的に取り入れられている点が特筆される。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 62 号

白鳥家番屋



所在地／小樽市祝津 3 丁目 191

建築年／明治 10 年代建築

構 造／木造平家

祝津の漁場では、明治 2 年、新政府の誕生に伴い出願者に土地の永住権と漁業権が与えられた。この際に漁業権を得たであろう白鳥家初代・白鳥喜四郎は、明治 10 年に地区の総代となった。

白鳥家番屋は祝津に現存する最古の番屋建築である。向かって左手の主玄関を入ると網元の住まいで、広間型の座敷であった。右手の脇玄関を入ると「ダイドコロ」と呼ばれる漁夫が滞在する場所で、L字型に「ネダイ」が廻る。上部のネダイは、吊りボルトによって吊られる珍しい構造である。両者に大屋根を架け一体とし、屋根には煙出しを設けた、典型的な番屋建築の姿を見せる。

内部が大幅に改修されており、また長い間使用されていなかったため損傷が激しかった。一時は取り壊してトイレを設置する計画が話題に上るほどの扱いを受けた。しかし料理店として改修されたことで、部分的にはあるが往時の姿を偲ぶことができる。

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第1号

大家倉庫



所在地／小樽市色内2丁目3-12

建築年／明治24年(1891)

構造／木骨石造平家

古い倉庫というと、普通は三角の切妻屋根をイメージするが、大家倉庫の外観は強烈なインパクトを与える。それは、巨大な越屋根と2つのアーチである。越屋根は高窓から内部に光を取り入れる役割を果たす。アーチは2重として下部に柱型を付け、単純になりがちな倉庫の外観に軽快な印象を生み出している。外壁には札幌軟石が用いられている。右側のアーチに新しい軟石が使われているが、これはトラックの荷役のために一度開けた部分を復原したものである。アーチ上部に見られる横線は、屋根が差し掛けられ豆の選別場が設けられた跡である(戦時中に取り壊しが命じられ現存せず)。

妻面にある「ヤマシチ」の印は、創立者の4代目・大家七平に由来する。加賀の出身で、明治期小樽の最盛期を築き上げた加越能商人の一人であり、汽船を導入するなど海運業で活躍した。

現在／(株)北一硝子

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 13 号 小樽倉庫



所在地／小樽市色内 2 丁目 1-20

建築年／明治 23 年（1890）～明治 27 年（1894）

構造／倉庫：木骨石造平家 事務所：木骨煉瓦造 2 階建

小樽倉庫は、小樽の軟石倉庫の代名詞といえる存在である。まず目を引くのは、小樽臨港線に面した長大な姿である。中央の建物は事務所で、軟石のおとなしい色合いの中であって、煉瓦の色が良いアクセントとなっている。屋根に載る 8 つのシャチホコも目を引く。構造は、軟石の外壁に木の柱を内側に建てる、木骨石造と呼ばれるもので、明治中期以降小樽の倉庫で多く採用された。

建設当時、明治中期の小樽では、旧勢力の近江・越後の商人に対し、加賀・越前・能登の「加越能商人」が新興勢力として頭角を表し始めた時期であった。小樽倉庫の創立者である西出孫左衛門と西谷庄八は加賀の出身であり、その勢力が建築にも現れている。

現在は小樽運河プラザとして、運河地区の観光拠点となっている。加えて、全体で口の字型を構成する平面を生かし、中庭ではイベントが開催されるなど、地域住民にも愛される存在である。

現在／小樽市総合博物館 運河館など

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 21 号 木村倉庫



所在地／小樽市堺町 7-26
建築年／明治 24 年 (1891)
構 造／木骨石造 2 階建

かつて堺町の浜辺には「立岩」という大きな岩があり、交通の便が悪かったが、明治後期に取り除き一帯を岸壁としたことで解消され、商店が立ち並んだ。

それより以前、堺町で倉庫業を営んでいたのが木村圓吉である。木村は倉庫業の他、海産物業、船問屋、不動産業など多岐にわたる分野で成功を収め、1号から9号までの営業倉庫が建てられた。現存する木村倉庫はかつて3号倉庫として使われていたものである。内部は中央廊下を挟んで2つの倉庫に分けられ、その廊下には港から引き込まれたトロッキのレールが今も遺されている。今でこそガラス細工は小樽観光の代名詞となっているが、昭和58年(1983)から既に店舗に転用されており、倉庫再利用の先駆けとしても価値がある。

現在／(株)北一硝子三号館

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)
photo 岩浪 睦(写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 63 号 篠田倉庫



所在地／小樽市港町 5-4
建築年／大正 14 年（1925）
構 造／木骨煉瓦造 2 階建

美濃傘売りから出発した、美濃出身の篠田治七が創立した倉庫。小樽では数少ない煉瓦を用いた倉庫で、軟石やコンクリートの中で、煉瓦の色が映える。建築的な特徴として、「平入り」という妻面（屋根部分に三角形ができる側の面）と垂直方向に入口を設けている点を挙げることができる。小樽運河沿いに遺る多くの倉庫が、運河側に妻面を向けて入口としている（妻入りということと対照的である。平入りのためか、運河側とその反対の道路側に、開口部が比較的多いのも特徴である。鉄扉の「大同倉庫」は、明治後期から大正期にかけて有幌町で建設された倉庫を営業していた 7 社が、戦後、昭和 21 年（1946）政府の指導により合併し誕生した企業である。

平成 8 年（1996）の改修工事で新しい煉瓦に取り替えられたが、古い色合いになるよう工夫されている。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 20 号 渋澤倉庫



所在地／小樽市色内 3 丁目 3-20

建築年／明治 28 年（1895）

構造／木骨石造平家

渋澤倉庫を一目見たときのインパクトは、大家倉庫、小樽倉庫に引けをとらない。それは両翼を張り出した平面による。日本郵船(株)小樽支店や北海道庁赤れんが庁舎など、明治期の建築には多く見られるが、倉庫では珍しい。コの字型の平面は、2つの並行する細長い倉庫に、大きな切妻屋根を架けることで造られた。2つの細長い倉庫は、石材や開口部などから、別個に建てられたと思われる。

現在／小樽ゴールドストーン OTARU CRUISE SERVICE

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 22 号 増田倉庫



所在地／小樽市色内 3-10-9
建築年／明治 36 年（1903）
構造／木骨石造 2 階建

増田倉庫、広海倉庫、右近倉庫は小樽運河の北側にあつて、現在も当時に近い景観を遺している。いずれも妻面を運河側に面し、明治 20～30 年代に建てられた、木骨石造の倉庫である。アーチと越屋根を持つ広海倉庫と右近倉庫に比べ、増田倉庫は簡素な外観をしているが、三角形の切妻屋根は建築の持つ本来の魅力を我々に感じさせる。

text 原 朋教（建築史家、工学博士）
photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 23 号

上勢友吉商店



所在地／小樽市入船 1 丁目 1-5
建築年／大正 10 年（1920）
構 造／石造 3 階建

小樽では明治末期以降、石造で 3 階建て程度の事務所建築が建てられていた。小樽新聞社（明治 42 年、現在は北海道開拓の村へ移築）とともに、上勢友吉商店はその希少な事例である。先に述べたとおり、小樽の石造倉庫の大半は、内部に木の柱を建てた木骨石造の倉庫である。しかしこの建築は、木骨石造ではない本石造（石を積み上げただけの構造）であり、その点で貴重である。

現在／遊工房

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 42 号 島谷倉庫

所在地／小樽市色内 1 丁目 2-17
建築年／明治 25 年（1892）
構 造／木骨石造平家



小ぶりでかわいらしい倉庫。しかし構造は近隣の歴史的な倉庫と同じく、木骨石造である。壁面にはかつて建物が併設されていた跡が残る。正面の細い通りは「出抜き小路」と呼ばれ、明治期には北浜町と色内町の境界線であった。現在は色内通りと小樽臨港線に挟まれ、裏通りという扱いにされがちだが、密集する倉庫が当時の雰囲気を思い起こさせる。

現在／北のアイスクリーム屋さん

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 43 号

作左部商店蔵



所在地／小樽市住吉町 15-3
建築年／明治初期
構造／土蔵造 2 階建

小樽に数多く現存する木骨石造の倉庫が建てられ始めたのは、明治中期のことである。それ以前、明治初期には土蔵造が多く建築された。この土蔵は、小樽に遺る希少な土蔵造の蔵として価値が高い。防火のために外壁と屋根を土で塗り固め、外壁を板で保護する。外壁に板を用いる方法は、例えば北海道の同じ日本海沿岸である江差の土蔵造にも見られる。さらに屋根には「鞘」と呼ばれる二重の屋根を架けている。

現在／シーボート

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 51 号

高橋倉庫

所在地／小樽市色内 1 丁目 2-17
建築年／大正 12 年（1923）
構 造／木骨石造 2 階建



創建者の高橋直治は、第一次世界大戦の際に雑穀商として小豆を西欧へ輸出し、莫大な利益を上げ、ロンドン相場にまで影響を与えたという。この倉庫は、大豆を収めるための倉庫であった。また高橋は政治家としても有名で、小樽で最初の衆議院議員であり、後に貴族院議員にも選出されている。

平成元年（1989）に倉庫を改修し開業したが、当時はまだこのエリアに観光客が少なかった時代であり、小樽運河沿い倉庫の保存活用の先駆けとしても、その取り組みには価値がある。

現在／石原プロ おもしろ撮影館

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 53 号

日本石油(株)倉庫



所在地／小樽市色内 3 丁目 6-18

建築年／大正 9 年 (1920)

構造／木骨石造平家

この倉庫は現在、公園の休憩所となっているため、普段はなかなか見られない倉庫内部をじっくりと見ることができる。小屋組はクイーンポストトラス（対束小屋組）と呼ばれ、三角形の中に大きな口の字型ができる洋風の構造である。平成 10 年（1998）の運河公園オープンに先立ち、新しい石材を用いて建て直されている。

現在／運河公園休憩所

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 54 号

日本郵船(株)小樽支店残荷倉庫



所在地／小樽市色内 3 丁目 7-6

建築年／明治 39 年 (1906)

構造／石造平家

華やかな日本郵船(株)小樽支店の隣にあって、一見見落としがちな建築であるが、この倉庫も建築史的に価値がある。社屋と同時期に建てられ、設計・施工も同じく、それぞれ佐立七次郎、山口岩吉である。そのため社屋との共通性が見られる。軟石は小樽・天狗山産と推察でき、軟石の寸法、石積みの方法などが同じである。腰折れ屋根の小屋組も社屋と同様である。

現在／(株)小樽ナトリ

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 64 号

岡崎倉庫



所在地／1号棟：小樽市信香町 2-2 2・3号棟：小樽市信香町 2-24
建築年／1号棟：明治 38 年（1905） 2・3号棟：明治 39 年（1906）
構造／木骨石造平家一部 2 階建

江戸末期から明治初期、小樽で初めて市街地が形成された信香町は、明治 3 年（1870）に開拓使より命名された、小樽で最初の町名 8 町の一つである。明治後期に建てられたこの倉庫は、小屋組に束や梁を用いず垂木を棟から桁へ架けるだけの「垂木小屋」を採用している。柱や土台の腐食を防ぐため、基礎は 3 棟とも下部に煉瓦、上部に軟石を置いている。平成 8 年（1996）、壁が改修されている。

現在／田中酒造（株） 亀甲蔵

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 65 号

右近倉庫



所在地／小樽市色内 3 丁目 10-18

建築年／明治 27 年 (1894)

構造／木骨石造平家

北前船主・右近権左衛門が創立した倉庫。妻壁の印「//」は店印「一膳箸」で、船の帆柱に掲げられた船旗にも使われた。小屋組にはクイーンポストラス(対束小屋組)が用いられ、越屋根を設けている。正面下部の軟石の色が違うのは、平成 7 年 (1995) に強風で崩れ翌年修復したためである。左右非対称な正面で、中央と左側にアーチ付き開口部を持つ点も面白い。

現在／(株)北一硝子

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 66 号

広海倉庫



所在地／小樽市色内 3 丁目 10-19

建築年／明治 22 年 (1889)

構造／木骨石造平家

加賀の商人・広海二三郎が創立した倉庫で、北陸の海産物や塩、砂糖などを商っていた。かつてこの辺りは海岸が手前まで迫り、また背後には鉄道も通っていたことから、貨物の集積には最適な場所であった。屋根は越屋根といい、採光のため中央部分を高くし両側に段差を設けている。正面のアーチ付き開口部も魅力的である。

現在／(株)北一硝子

text 原 朋教 (建築史家、工学博士)

photo 岩浪 睦 (写真家)

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.

第 73 号

向井呉服店支店倉庫



所在地／小樽市稲穂 1 丁目 4-13
建築年／明治 40 年（1907）
構造／煉瓦造 4 階建

小樽では数少ない煉瓦造倉庫の一つであり、運河沿いの倉庫とは違った雰囲気を持つ。倉庫は 4 階建てで、街中の倉庫らしく背が高い。色の濃い煉瓦は焼き過ぎ煉瓦で、防水性が高いため要所に使われているが、一方で外観に変化を与えることにも貢献している。明治 37 年（1904）に稲穂町で大火があったことから、内側に土塗りの防火戸を備えている。

現在／カフェ & バー CANAL

text 原 朋教（建築史家、工学博士）

photo 岩浪 睦（写真家）

Copyright © 2015 NPO Otaru Works All Rights reserved.